

## 高井鴻山の絵画(1)

——鴻山が描いた絵および北齋に関連ある絵の疑問点について——

金田 功子

## はじめに

高井鴻山は江戸時代の文化三年、西暦でいうと一八〇六年、今から二〇八年前に生まれている。その生涯の多くを江戸時代に生き、明治十六年(一八八三)七十八歳で亡くなった。明治維新を迎えた慶応四年つまり明治元年(一八六八)には、すでに六十三歳になっている。

高井鴻山とはどんな人ですか、と問うと、大方の人は「北齋を小布施に連れてきた人」または「妖怪画を描いた人」という人が強い。両方ともに絵画に関係しているから、鴻山は絵師かというところではない。

それでは鴻山は何をしていた人なのか、つまり鴻山の職業は何か、というところ、鴻山は、小布施村<sup>かん</sup>上町の豪農商塩屋高井家十一代の当主である。

鴻山と北齋のつながりはさておき、町の高井鴻山記念館をのぞいてみよう。豪商としての高井家の遺品の他、書や絵画、幟、一弦琴などが展示され、鴻山の多芸ぶりをうかがわせる。また、北齋、梁川星巖、貫名海屋、勝海舟、佐久間象山ら多彩な顔ぶれの作品におどろかさされ、鴻山の七十八歳の生涯をほうふつとさせる。

小布施は北齋館ができて以来、「北齋と栗、そして花の町」としてどんどん有名になった。それも、もとはといえば、北齋が来るきっかけとなっ

た鴻山が小布施に居たからに他ならない。

もちろん、北齋は「世界の文化巨匠」鴻山は「信州の隠君子」。比べること自体おかしいのだが、高井鴻山という人物について正当な評価がなされていなくて面が多々みられる。

例えば、鴻山の絵を「所詮金持の学問のある素人画」と見る向きもある。上町祭り屋台天井絵の鴻山自筆の裏書きを疑問視し、天井絵縁絵の彩色について「鴻山などの素人に色彩を許すことはあり得ないと思う。」(『肉筆葛飾北齋画展』五島美術館)と、鴻山の縁絵彩色を否定している。また、裏書きに二度も記されている「所随老人」という北齋の名称についても、北齋自身が使用した名称ではなく、高井家がそう呼んでいた名、であり、鴻山の息子がその意を記した(『浮世絵芸術』39号)と記している。

また、「放屁の図」については展覧会の目録に「北齋・画」(信濃美術館「高井鴻山と信州の北齋展」となっていたり、さらに高井鴻山記念館に数百枚も遺る草花の画稿については、鴻山か、北齋か、はたまた当時小布施に大勢訪れていたという画人たちが描いたのか、記念館ができてから二九年もすぎたのに、いまだに釈然としない解釈のままである。

大正二年(一九一三)中村不折が高井鴻山の書画について記した評がある(『上水新聞』第十九号 大正二年八月一日)。不折は、「その書画の斯く迄妙域に達して居るとは思わなかった。」と感想を述べ、続いて「はじめ



写真1 高井鴻山肖像画  
絵の師横山上龍が描いた鴻山の肖像画。

に北斎に学んだといふが、如何にも其筆致が見えて居る。そうして北斎の匠気を脱して居るのがありがたい。「どの方面に向かつても俗気がない」「俗気匠気のない處は畫工輩の及ばざる處だ。」さらに、書についても「画と同じく些の俗塵を交へない」と評し、「かかる名家を先輩に仰いで」「非常に名譽」と述べている。

鴻山の絵の評価はともかくとして、鴻山は北斎の他に誰に絵を学び、どんな絵を描いたのか、北斎と関連がある絵はどのくらいあるのか、また、前述の疑問点について、ほんとうはどうなのか。これらについてできるかぎり説明するとともに、鴻山にとって絵画とは何だったのか、絵を通じた北斎とのつながりはどうだったのかを探ってみたい。

## 一 北斎に会う前の鴻山の絵の師について

鴻山の絵の師は、最初から北斎であったのではない。鴻山が初めて京都に遊学した年月と年齢は、「文政三年十五歳の春」というのが定説になっ

ている。しかし、晩年鴻山が東京府に提出した「私学開業願」の「履歴」の項に、「文政二己卯年西京へ遊学」とある。「文政二己卯年」は鴻山十四歳である。この履歴からすると、第一回目の京都遊学時、つまり十四、五歳の時、岸派の祖岸駒・岸岱親子に絵を学んでいる。つまり岸駒・岸岱親子が、鴻山の最初の絵の師である。

次の師は、貫名海屋である。海屋は鴻山の書の師として知られているが、前掲の「履歴」の項に、「猶復出都貫名海屋翁二從ヒ漢学及書画致修業」と鴻山が記している。海屋は鴻山二度目の京都遊学時の絵の師である。

もう一人、鴻山が京都で学んだ絵師がいる。横山上龍(乗良。三島上龍ともいう)である。上龍は京都の町絵師で、浮世絵画家である。鴻山が上龍について絵を学んだ時期は明らかでない。

その後、江戸で知りあったのが葛飾北斎である。北斎は鴻山にとって最後の絵の師であろう。

北斎をのぞいて、鴻山の絵の師の概略を記す。

**岸駒・岸岱** 鴻山が本格的に絵を学んだ最初の師である。岸派の創立者

岸駒は、宝暦六年(一七五六)生まれ、北斎より四つ歳上である。

加賀国(石川県)金沢の生まれで、幼少より絵を好んだという。四方を周遊した後、京都に出た。天明四年(一七八四)に有栖川宮の近侍として仕え、雅楽助の名を賜っている。寛政の頃には、内裏造営にあたり、障壁画を描くという宮中の仕事をし、文化六年(一八〇九)に越前守に任ぜられている。鴻山の遊学時には、京都における一流の絵師であった。その後、天保七年(一八三六)従五位下を賜り、二年後の同九年、八十三歳で没している。

虎の岸駒といわれるほど虎の絵は有名で、虎を描いては当代彼の右に出る者はいなかったといわれる。水墨画をよくし、画風は京都の四條派